

とって、あんまり、ちょっと塾

日本史と古文

1. 2ページは神奈川県公立高校の過去問です。選択肢として挙げられている古典文学の題名を書きだしなさい。
2. 日本史の流れを把握するために、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、明治時代が始まった西暦年をしらべなさい。
3. 4ページと5ページに挙げた重要な古典文学について、作者、時代、冒頭文および内容を読みなさい。興味のあるものについては、暗記しなさい。

「春は明け方。」という内容で始まる平安時代に成立した随筆で、約三百段からなる。一条天皇の中宮(后)に仕えた女房によって書かれた。宮廷の日常生活を記録したものや自然や人間に対する感想などが描かれている。

- 1 おくのほそ道
- 2 徒然草
- 3 平家物語
- 4 枕草子

「祇園精舎の鐘の音には、諸行無常の響きがある。」という内容で始まる鎌倉時代に成立した軍記物語である。ある武家の一門の約五十年にわたる栄華と滅亡を描き、琵琶法師の語りによって広く民衆に親しまれた。

- 1 源氏物語
- 2 平家物語
- 3 竹取物語
- 4 伊勢物語

平安時代初期、醍醐天皇の命令によって作られた最初の勅撰和歌集である。約千百首の歌が春・夏・秋・冬・恋などの部に分類されて編集されている。撰者は、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人である。

- 1 万葉集
- 2 古今和歌集
- 3 新古今和歌集
- 4 和漢朗詠集

(カ) 次の文章は、ある古典文学作品について説明したものである。その古典文学作品として最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

「月日は永遠にとどまることのない旅人のようなものであって、過ぎ去っては新しくやってくる年もまた旅人である。」という内容の文章で始まる江戸時代に書かれた紀行文であり、東北や北陸などを経て大垣(岐阜県大垣市)に至るまでの旅行中の出来事が記されている。

- 1 枕草子
- 2 おくのほそ道
- 3 土佐日記
- 4 平家物語

「退屈なのにまかせて心に浮かんだとりとめのないことを書きつけていった。」という内容で始まり、筆者の自然や人に対するものの見方や考え方について述べられている鎌倉時代に書かれた随筆である。

- 1 竹取物語
- 2 枕草子
- 3 平家物語
- 4 徒然草

日本の歴史と文学

500	1000			1500	
645 大化の改新 仏教伝来 538	710平城京 794 平安京 古事記？ 万葉集	900古今和歌集 1000枕草子	1185 鎌倉幕府 1333鎌倉滅亡 1230平家物語 1330徒然草 藤原定家	1467応仁の乱	
1500	1600	1700	1800	1900	2000
	1603 江戸幕府	1716 享保 1702奥の細道	寛政 葛飾北斎	1868 明治維新 天保 1912大正元年 1926昭和元年 平成元年1989 令和元年2019	

遣唐使廃止：894（白紙に戻そう遣唐使）

check！：漢字文学からひらがな文学への移行
万葉集 ⇒ 古今集 ⇒ 枕草子

藤原定家：新古今和歌集、百人一首の編者

無常観：平家物語・方丈記・奥の細道の序文

題名 著者	成立 年	冒頭文 / 解説
万葉集	奈良 760以降	現存する最古の和歌集。4500余首が万葉仮名で記述されている。 田兒之浦 従 打出而見者 真白衣 不盡能高嶺 尔 雪波零家留 田子の浦に うち出でてみれば 白妙の 富士のたかねに 雪は降りつつ
竹取物語 作者不詳	平安 900頃	今となっては昔のことですが、竹取の翁という者がいました
伊勢物語 作者不詳	平安 900頃	むかし、男ありけり / 名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人 はありやなしやと 在原業平をモデルにしたと伝え垂れる歌物語。
古今和歌集	平安 900頃	(仮名序) やまとうたは、ひとのこころをたねとして、よろづのことはとぞ なれりける。(真名序) 夫和歌者、託其根於心地、発其華於詞林者也。
土佐日記 紀貫之	平安 935頃	男が書くと聞く日記というものを、女(の私)もしてみようと思って書くので ある。
枕草子 清少納言	平安 1000頃	春は曙(あけぼの)。やうやう白くなりゆく山際(やまぎわ)、すこしあかりて、 紫だちたる雲の細くたなびきたる。
源氏物語 紫式部	平安 1000頃	いづれの御時にか、女御(にようご)、更衣(こうい)あまたさぶらひたま ひけるなかに、いとやむごとなき際(きわ)にはあらぬが、すぐれて時めき たまふありけり。 光源氏の恋愛、権力闘争など貴族社会を描いた54帖の小説。

題名 著者	成立年	冒頭文 / 解説
今昔物語 作者不詳	平安 1120頃	今は昔、皇極(こうぎよく)天皇と申し上げた女帝の御世に、皇子の天智(てんじ)天皇は皇太子でいらっしゃいました。 今は昔、摂津国の辺りで、盗みをするために上京してきた男がいた。まだ日が落ちていないので、羅城門の下に隠れていた。
方丈記 鴨長明	鎌倉 1212	行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。 枕草子、徒然草と共に三大随筆のひとつ。天変地異も記載され歴史的資料としても重要。
新古今和歌集 藤原定家ら	鎌倉 1220頃	やまとうたは、むかしあめつちひらけはじめて、人のしわざいまださだまらざりし時、葦原中国のことはとして、稲田姫素鷺のさとよりぞつたはれりける。(仮名序)
平家物語	鎌倉 1230	祇園精舎の鐘の声諸行無常の響あり 娑羅双樹の花の色盛者必衰の理を顕す 奢れる人も久しからずただ春の夜の夢の如し
徒然草 兼好法師	鎌倉 1330頃	つれづれなるままに、日くらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。
奥の細道 松尾芭蕉	江戸 1702	月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也 舟の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老をむかふる物は日々旅にして旅を栖とす

古文のポイント

- 歴史的仮名遣いを知ろう
 - くれなゐ(紅) たつたがは(竜田川) みづ(水) けふ(今日)
- 係り結びの法則を知ろう
 - 係りの助詞:ぞ、なむ、や、か、こそ
 - 結びの活用形:ぞ・なむ・や・かー連体形、こそー已然形
 - 意味:強調(ぞ、なむ、こそ)、疑問・反語(や、か)
- 枕詞や序詞があるんだ
 - ちはやぶる一神、あしびきの一山、山鳥の尾のしだり尾の一長
- 主な作品の冒頭文を知ろう
- 頻出単語を知っているといいかも

百人一首

短歌	文法
あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む	枕詞+序詞+係結
陸奥(みちのく)のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに	歴史的仮名遣い
ちはやぶる 神代(かみよ)も聞かず 竜田がは からくれなゐに みづくくるとは	歴史的仮名遣い + 枕詞
月見れば千々(ちぢ)に物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど	係り結び
恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか	歴仮名+係結「き」の已然形
いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重(ここのへ)に匂ひぬるかな	歴史的仮名遣い
長らへばまたこのごろやしのはれむ憂(う)しと見し世ぞ今は恋しき	係結2個+歴仮名「む⇒ん」
人も愛(を)し人も恨めしあぢきなく世を思ふゆゑにもの思ふ身は	歴史的仮名遣い

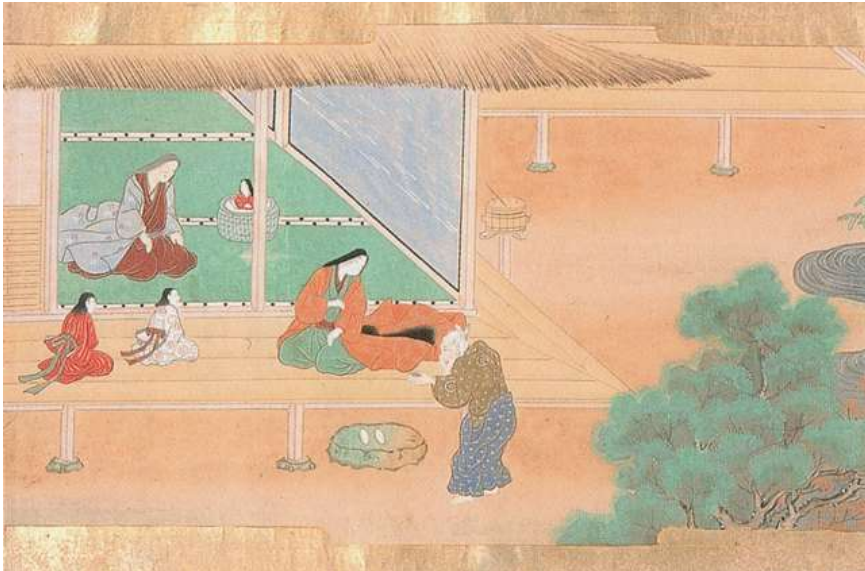
単語帳

古語	現代語	古語	現代語
あいなし	つまらない、不快だ	あさまし	意外だ、驚きあきれたことだ
あはれなり	趣がある、かなしい	あした	朝、翌朝
ありがたし	めったにない、難しい	うつくし	かわいらしい、うつくしい
いとほし	気の毒だ	えもいはず	何とも言いようがない
かなし	かわいい、趣がある	おどろく	目を覚ます、気づく
すさまじ	興覚めだ、がっかりした	さうざうし	もの足りない
つゆ	まったく～ない	つきづきし	似つかわしい、ふさわしい
ねんごろなり	心がこもっている、親切だ	つとめて	早朝
はづかし	立派だ、気詰まりだ	つれづれなり	たいくつだ
をかし	趣がある、美しい	やうやう	だんだんと

竹取物語

けり（過去）助動詞
…た …たそうだ

なむ（強調）係りの助詞
「けり」の連体形「ける」で
結ぶ



作者・年代不詳

今となつては昔のことですが、竹取の翁という者がいました。野や山に分け入つて竹を取つてはいろいろなことに用立てたのでした。その名をさぬきの造と言いました。（ある日その竹の中に、根元が光る竹がひとつありました。不思議に思つて、近寄つてみると竹筒の中が光っています。それの中をみると三寸ぐらいの人が、とてもかわいらしい様子で座っています。

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつづ、よろづのことに使ひけり。名をばさぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いとうつくしうてみたり。

土佐日記

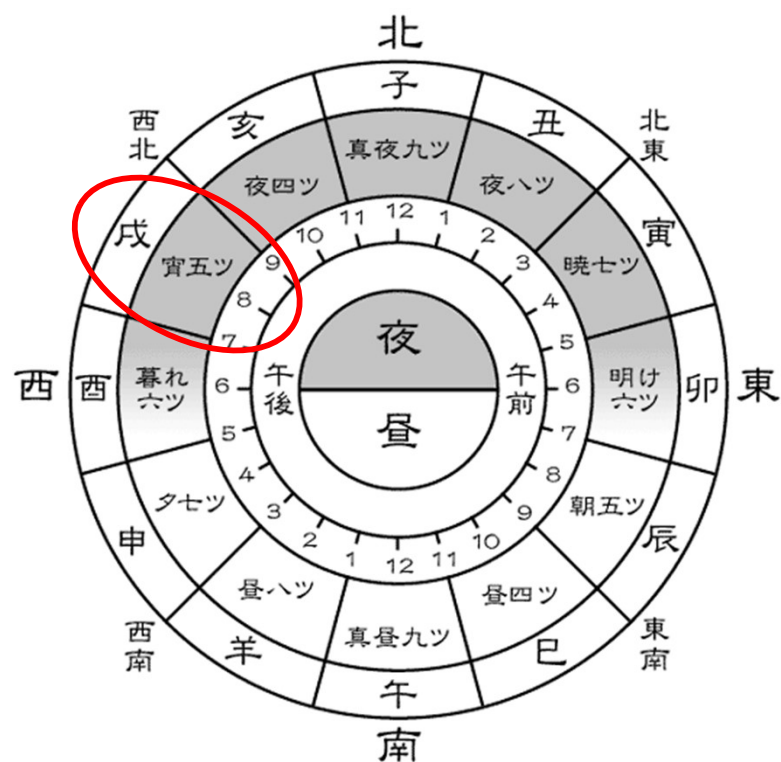
紀貫之・935年頃

すなる (サ変「す」+伝聞「なり」)

..すると聞いている

するなり（サ変「す」の連体形+断定「なり」）

・・するのである



男もすなる日記といふものを 女もしてみむとて
するなり。その年の十二月の二十日あまり一日の
日の戌の時に門出す。そのよし いささかにものに
書きつく。

伊勢物語

作者不詳(モデルは在原業平?)・平安中期(10世紀?)

むかし、男初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして狩りに往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男がいまみてけり。思ほえず、ふる里にいととはしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、信夫掙の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすりころもしのぶの乱れかぎりしられず
となむおひつきて言ひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。

陸奥のしのぶもち 掙り誰ゆゑに乱れそめにし 我ならなくに

といふ歌の心ばなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

昔、ある男がいた。元服の儀式をすませて、奈良の都春日の里の領有する土地の縁があつて、狩をしに行つた。その里にとても美しく色香漂う姉妹が住んでいた。男はその姉妹を垣根越しに覗き見た。すると想像していたよりもはるかに美しい姉妹だつた。古い都には似つかわしくないほど美しかつたので、男は気持ちをかき乱されてしまつた。男は着ている狩衣の裾を切つて、それに歌を書いて姉妹に送つた。男はちょうど、しのぶ掙りの乱れ模様の狩衣を着ていた。

春日野の若紫の掙り衣の、その乱れた模様のうちに、私はあなたの方のためにこんなにも心乱されてしまいました。

男はすかさず大人びた態度で歌を贈つた。この歌を贈るなりゆきが男は時機にかなつて、趣深いとても思つたのだらう。

「陸奥のしのぶ掙りの乱れ模様のうちに、こんなにも心乱されたのは誰のせいでしょうか。それは私自身のせいじゃない。まさにあなたのために、心乱されたんです。」という河原左大臣源融の歌の情緒である。昔の人はこんなふうに、情熱にまかせて風流なことをしたものだ。

伊勢物語

東下り

むかし、男ありけり。その男、身をえうなきもの
に思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき国
もとめにとてゆきけり。もとより友とする人ひとり
ふたりしていきけり。道しれる人もなくて、まどひい
きけり。三河の国八橋といふ所にいたりぬ。そこを八
橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つ
わたせるによりてなむ。八橋といひける。その沢のほ
とりの木のかげにありて、かれいひ食ひけり。その
沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て
ある人のいはく、「かきつばた」といふ五文案、いつも
じを句のかみにするゑ、旅の心をよめ」といひければ
よめる。

から衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬ
る たびをしぞ思ふ

とよめりければ みな人 かれいひの上に涙おとし
てほとびにけり。 (中略)

なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国とのなかに
いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河
のほとりにむれゐて、思ひやれば、かぎりなく遠くも
来にけるかな。とわびあるに、渡守、「はや船に乗れ
日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな
人もものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。

さるをりしも、白き鳥の、はしとあしと赤き、鴟の大
きさなる、水の上に遊びつつ魚いを食ふ。京には
見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。渡守に問ひけれ
ば、「これなむ都鳥」といふを聞きて

名にしおはばいざ言問はむみやごどりわが思ふ人はあ
りやなしやと

とよめりければ、船ぞりて泣きにけり。

伊勢物語

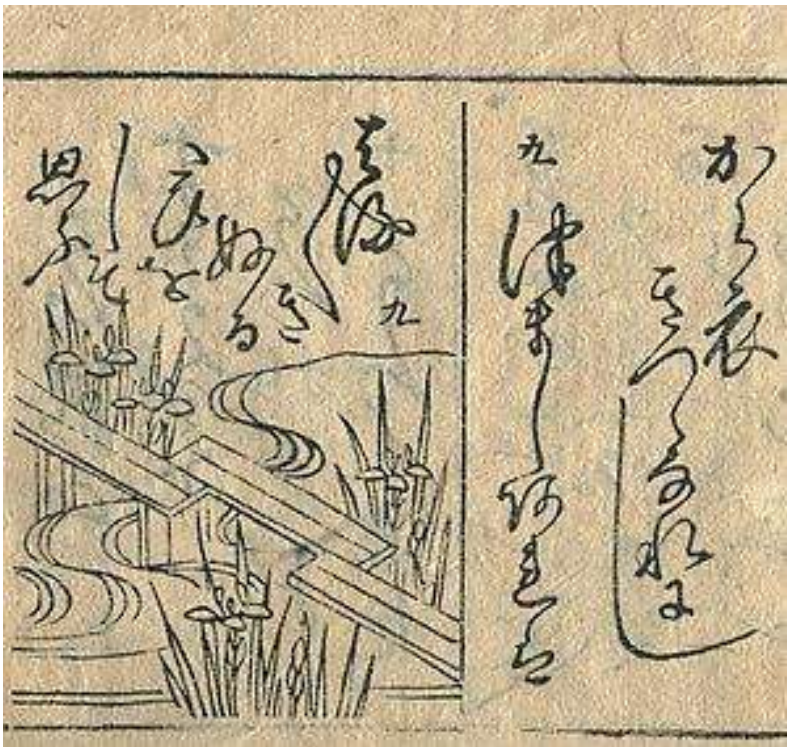
東下り 現代語訳

昔 男がいた。その男は自分の身をいらないものと思つてしまつて「京にはいないでおこう 東国の方に住むのによい国を探しに行こう」と言つて行つた。前から友人を一人二人つれて行つた。道案内もなく迷つて行つた。三河国の八橋というところについた。そこを八橋というのは水がクモの足のようにながれて流れているので 橋を八つ渡していたからね 八橋つていうんだつて。その水辺の木かげに下りて座つてお弁当を食べた。その沢にかきつばたがとてもきれいに咲いていた。それを見て一人がいつた。

「かきつばたという文字を句の頭に置いて旅の気持ちを詠め

といつたから詠んだ歌

からごろもを きながら慣れ親しんだつまがいるので、そこから はるばるやてきた たびを思うことだと詠むと みんな 妻を都においてきたものだから、ごはんの上にぼたぼた涙を落としてごはんがふやけてしまつた。



伊勢物語

東下り 現代語訳続き

さらにどんどん行つて 武蔵の国と下総の国との間に
とても大きな川がある。それを隅田川という。その川の
そばに集まつて座つて思ひをはせると 限りなく遠くに
までも来てしまつたことよと嘆きあつていると船頭が
「早く舟に乗れ 日も暮れてしまふと言つので 乗つて
渡ろうとすると 人々は皆わびしくて 都に想う人がい
ないわけではない。ちようどその時 白い鳥で 嘴くち
ばしと足とが赤い、 鳴しぎの大きさであるのが水の
上に遊びながら魚を食べる 都には見えない鳥なので
人々は皆 知らなかつた。船頭に尋ねると「これはなあ
都鳥」といふのを聞いて
**名にし負はば いざ言問はむ都鳥 わが思ふ人はありや
なしやと**



ゆりかもめ(都鳥)

枕草子

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜、月のころはさらなり、闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほかにうち光て行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ、夕日の差して山の端いと近うなりたるに、鳥の寝所行くとして、三つ四つ、一つ二つなど飛び急ぐさ、あはれなり。まいて雁などの連ねたるがいと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音などは、た言ふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きもまたさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るもいとつきつきし。昼になりて、ぬるくゆるびもといけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

春は明け方がいい。だんだんと白くなつてゆく山際の方の曾良が少し明るくなつて、紫がかった雲が細くたなびいているのがいい。

夏は夜がいい。月が輝いている時間帯は言うまでもなく、闇、月が登っていないのときでも、螢が多く飛んでいるのがいい。また、たくさん飛び交うてはいなくても、螢が一匹二匹とほのかに光つて飛んでいるのも趣がある。雨が降っているときも趣がある。

秋は夕暮れがいい。夕日が落ちてきて山の端が近く感じるようになつてきたころに、鳥が巢に帰ろうと、三羽四羽、一羽三羽と飛び急いでいる様子にさえ心がひかれる。ましてや雁などが列をつくつて飛んでいる様子が小さく見えるのはとても趣があつてよい。日が沈んでしまつてから聞こえてくる風の音や虫の音なども、言うまでもなくよい。

冬は早朝がいい。雪が降っているときは言うまでもない。霜がおりて白くなつているのも、またとても寒い時に、火を急いで起こそうと炭をもってくるのも冬の朝に大変似つかわしい。しかし、昼になつてだんだんと暖かくなつたときに、火桶の火も白い灰になつてしまつているのは似つかわしくない。

新古今和歌集

藤原定家ら(撰者)1210年頃

仮名序

やまとうたは むかしあめつちひらけはじめて 人のしわざいまださだまらざりし時 葦原中国のことのはとして 稲田姫素鷺のさとよりぞうたはれりける しかありしよりこのかた そのみちさかりにおこり そのながれいまにたゆることなくして いろにふけり こころをのぶるなかだちとし 世をおさめ たみをやはらぐるみちとせり。(中略)

万葉集にいれる哥は これをのぞかず 古今よりこのかた七代の集にいれる哥をば これをのする事なし。たゞし ことばのそのにあそび ふでのうみをくみても そらとぶとりのあみをもれ みづにすむうをのつりをがれたるたぐひは むかしもなきにあらざれば いまも又しらざるところなり。すべてあつめたる哥ふたちゝはたまき なづけて新古今和歌集といふ。

仮名序 現代語訳

大和の国の歌は 昔天地が開け始めて 人の営みがまだ始まっていなかった時に、日本の言葉として櫛名田比売 素戔鳴尊が住んでいた里より伝わった。その昔より今まで、その和歌の道盛んに興り、その流れは今に絶えることはなくて、恋情に没頭したり、心中を述べる仲立ちとして、世を治めて、民の心を和らぐ道具としていた。(中略)

撰歌の方針として 万葉集の歌は これを除かないで 古今和歌集より 七代の勅撰和歌集の歌は これを載せることはない。ただし、多くの歌を調べ、撰んでも 空飛ぶ鳥も網を逃れて、水に住む魚も釣られるのを逃れるたぐいは、昔も無いわけではないので、今もまだ知られていない歌もあるかもしれない。全て集めた歌は 二千首 二十巻あり、名付けて新古今和歌集という。

徒然草

吉田兼好・1330年頃

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

することもなく手持ちぶさたなのにかかせて、一日中硯に向かつて、心の中に浮かんでは消えていくとりとめもないことを、あてもなく書きつけていると、(思わず熱中して、異常なほど狂ったような気持ちになるものだ。



今昔物語

作者不詳・平安時代後期(1120年頃)

巻22第1話 大織冠始賜藤原姓語第一

今は昔 皇極こうぎよく 天皇と申し上げた女帝の御世に、皇子の天智てんじ 天皇は皇太子でいらしやいました。その当時一人の大臣がいました。蘇我蝦夷そがのえみし といひ、馬子(うま)の大臣おとどの子です。蝦夷は長年 朝廷に仕えていました。老境に入り、からだも老い衰えたので、参内するのとをすっかりやめてしまいました。そのため、子の入鹿いるかを自分の代わりとして常に参内させ、政務を執り行わせていました。

これによつて、入鹿は政權をほしいままにし、国を自分の思いのまま動かしていましたが、あるとき、皇太子でいらしやつた天智天皇が蹴鞠けまりをしておられるところへ、入鹿もやつてきて、それに加わりました。そのとき大織冠だいしよくかんはまだ公卿にもなつていず、大中臣おおなかとみの「鎌子」といふておいででしたが、この方も来て一緒に蹴鞠をなさつておられました。ところが、皇太子が鞠を蹴られたとき、お沓くつが御足から脱げて飛んで行つた際、入鹿はおごり高ぶつた心から皇太子をすかり馬鹿にして、あざわらいながらそのお沓を外の方蹴飛ばしてしまいました。皇太子はひどく困惑され、顔を赤らめて立つておいでになりましたが、入鹿がそのまま平然とした顔つきで立つているので、大織冠はあわててそのお沓を拾つて差し上げ、他の人でなく身分の低い自分がこのようなことをしても、それは自然な気持ちからで、大して悪いことをしたとも思わなかつたのでした。

(中略)

そのとき、大織冠が自ら太刀を抜いて走り寄り、入鹿の肩に切りつけたので、入鹿は走つて逃げようとするのを、皇太子が太刀を取つて入鹿の首を打ち落とされました。その首は飛び、高御蔵たかみくら、大極殿の玉座のもとに参つて、「わたくしには罪がありません。何事によつて殺されるのでしょうか」と無実を申し上げました。天皇はこの企てを前もつてご存知ない上に、女帝でいらしやいましたので、恐れられて、高御蔵のとばりを閉じてしまわれ、そのため首はとばりに当たつて下に落ちたのでした。